法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

丸山眞男「古層論」の可能性について

阿部，裕行

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
69
(開始ページ / Start Page)
13
(終了ページ / End Page)
20
(発行年 / Year)
2012-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008284

Hosei University Repository

丸山眞男「古層論」の可能性について

法政大学　大学院紀要　第 69 号抜刷
2012 年 10 月

阿 部 裕 行

Hosei University Repository

丸山眞男「古層論」の可能性について

人文科学研究科　日本文学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程２年　阿　部　裕　行

はじめに

丸山は日本思想の基底には執拗にくりかえされるひとつの音型があって、その音型は外来思想が日本に入ってくるとき、外来思想にまざりあい日本的なものに変容させる働きをすると述べている[1]。それは「原型」「古層」「執拗低音」とさまざまに名づけられる。歴史を通じて変化しない思想の原初形態といった実体的なものではなく、ひとつの音型と表現されているようにまじりあって同じような変容、修正をもたらす思考のパターンなのである。「古層」（本稿では丸山論文の用語にあわせ「古層」をおもに使う）は、われわれの意識の基底にありつづけ、われわれの思考様式に影響を与えてきたと丸山は考える。

『丸山眞男講義録』第四冊の「解題」によると一九六三年の丸山の講義では「普遍者の自覚」の章がたてられていた。一九六四年にはそれがないのだが、「解題」によれば丸山は「普遍者の自覚」を妨げるものとして、「普遍者の自覚」に対立するものとして「原型」＝「古層」をとらえていたがゆえに、当初「普遍者の自覚」の章を考えていたようである。いかなる時代、いかなる状況にあっても主体的に判断、決断できるためには歴史を超えた「普遍的なもの」に帰依する必要がある。しかしながら、われわれには「普遍的なもの」という観念はなかなか根づかない。なぜそうなのだろうか。それを妨げるものが「古層」である。ではその「古層」とはいかなるものか。その問いに答えようとしたのが、論文「歴史意識の「古層」」である。『古事記』『日本書紀』を素材として考察がおこなわれているが、なぜ古代に素材を求めたのかといえば、思考のパターンの「古層」がそこにあると考えたからであり、それが「普遍者の自覚」「主体的な判断、行動」を妨げる、その後も影響をあたえつづける要因であるとみたからである。

丸山の「古層論」は正当に評価されていない。外来思想が入る以前から「日本独自の思想」があった。外来思想が流入しても変化することのない「日本独自の思想」があると主張する「日本文化論」のいう「文化決定論」とはまったくちがうものである。丸山の「古層論」のもつ意味を丸山の著作集、講義録にもとづきながら考えてみたい。

第一章　「古層論」にいたる思考の軌跡

丸山はなぜ日本思想における「古層」の問題をとりあげるにいたったのだろうか。「古層論」を考えるにさきだって、丸山が「古層論」にいたるようになった思考の軌跡を追ってゆきたい。「古層論」は突然考えられたものではなく、長い思考の後にいたった思想的視点である。したがって「古層論」を考えるにあたっては丸山の思想の軌跡をたどる必要がある。米谷匡史は「丸山真男の日本批判」[2]において、丸山の多様な思考のうち「日本批判」という一点にしぼって、丸山の思考の軌跡を考察している。そこでは丸山の「古層論」にいたる軌跡が、簡潔に論じられている。米谷論文を参考にしながら、「日本思想における主体性の考察」という視点から、「古層論」にいたるまでの丸山の思考の軌跡をたどってみたい。

なぜこの視点から軌跡をたどるのかといえば、「私の学問的関心の最も切実な対象であったところの、日本に於ける近代的思惟の成熟過程の究明」と自らの研究の中心主題について述べているように、丸山が主題にしてきたのは、「近代的思惟の成熟過程」、それはさまざまなテーマをふくんでいるが、その中のひとつの大きな

Hosei University Repository

テーマが「日本思想における近代的主体の成熟過程の考察」でもあったと考えられるからである。なぜそう考えられるかは、丸山の思考の軌跡をたどることで明らかにしていきたい。

丸山の初期の論文としては、戦時中に書かれた「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」（1940 年『国家学会雑誌』）、「近世日本政治思想における「自然」と「作為」」（1941 年― 1942 年『国家学会雑誌』）がある。これらの論文と「国民主義の「前期的」形成」（1944 年『国家学会雑誌』）をあわせ『日本政治思想史研究』（1952 年）としてまとめられる。

第一論文、第二論文とも江戸の朱子学をとりあげ、朱子学的思惟が解体していく過程に近代化の動きをみようとするものである。第一論文では朱子学的思惟が崩壊していく過程と徂徠が公と私を分けたという点に近代の萌芽があることを論じている。朱子学は「理」という自然法則を根本原理としているが、その原理は人間の規範ともなることにおいては、道徳規範でもある。この点からすると朱子学は自然法則と道徳規範が連続した「自然的秩序の論理」といえる。朱子学では個人道徳と国家規範も「理」によって連続させる。しかし徂徠は「個人道徳を政治的決定にまで拡張することを断固として否認」[3]するのである。公と私とを明確に分ける立場をとった。それを「公的な領域の独立、従ってまた私的な領域の解放こそまさに「近代的なもの」の重要な標徴」[4]とみるのである。

第二論文では、徂徠はゆらぐ社会規範を克服するために、朱子学の自然的秩序の論理から主体的作為の論理へと転換をはかったことを論じている。徂徠は「自然的秩序の論理の完全な克服には、自らの背後にはなんらの規範を前提とせずに逆に規範を作り出しこれにはじめて妥当性を賦与する人格を思惟の出発点」[5]に置くほかないと考えた。その人格とは道の絶対的作為である先王である。現実の社会混乱を克服するためには、「先王の作為が各時代の開国の君主によって、その度ごとの作為を媒介として実現」[6]されるべきなのである。このように徂徠学は社会規範を変えていくためには、自然的秩序の論理を克服する主体的な人格による「主体的作為」が必要であるとした。丸山は徂徠学の「主体的作為」に近代的主体の萌芽をみたのである。ただここでの主体は先王、各時代の君主に限定されていることに注意したい。まだ一般的個人の主体にはいたっていないのである。

自然的秩序の論理から主体的作為の論理への展開は、第二論文の最後に述べられているように、明治維新後の自由民権運動へとつながっていく。自由民権論の「人作説」である。「天造説」は「政治ハ人間ノ作為スベキモノニアラズ、天然体ヲ成スモノ」という考え方に対して、「人作説」は「政治ハ人間ノ制立スル所ニシテ器械ヲ作ルト同一ナレバ、如何様ニ之ヲ作ルモ人間ノ随意」[7]という考えである。「作為の論理」は自由民権論へと展開しながらも、反民権イデオロギーとしての自然的秩序思想にのみこまれていくのである。

自然的秩序思想の主導者は帝国憲法と教育勅語をそなえた大日本帝国である。まず国家があり、国家は絶対的権力をもち、国民はその権力に従わなければならない。教育勅語という倫理的価値をも強制する。主体的作為の論理、公私を分けるという、徂徠の思想にその萌芽がみられた「近代的なもの」は、この国体のもつ自然的秩序思想にのみこまれていくのである。

国民と国家の関係については、どのように考えていたのだろうか。丸山が近代日本のあるべき近代化の方向として考えていたのは、「近代的国民国家」である。

「一身独立して一国独立す」と唱えた福沢諭吉を丸山は高く評価する。国家に対して受動的に服従するのではなく、国民としての主体的立場を自覚して、個人の内面的自由を媒介にして国家というものは意識されなければならない。個人の主体的決断によって国民国家という政治的秩序が作為されなければならないと丸山は考えたのである。

この近代的国民主義は、国権論が民権論をおさえこみ、一方には「個人的内面性に媒介されないところの国家主義」と、他方には政治的秩序を作為する主体性をもたない「感覚的本能的生活の解放に向かうところの個人主義」[8]という二者に分裂することで挫折する。この挫折により近代的なものは圧殺されていく。日本ファシズムが台頭し、戦争へといたる。「一身独立して、一国独立す」と福沢がいったような意味の国家主義、つまり個人の解放を通じて、国家的独立を確保していこうという考え方は、明治時代が進むとともに個人の自由を抑圧する強大な国家権力の肯定へと変貌させられるのである。

戦後丸山は日本国家主義についての論文をつぎつぎと発表する。「超国家主義の論理と心理」（1946 年『世

Hosei University Repository

界』）「日本ファシズムの思想と運動」（1948 年『東洋文化講座』第二巻）「軍国支配者の精神形態」（1949 年『潮流』）など、国を戦争へといたらしめた日本国家主義について論じている。ここで論じられているのは天皇も戦争指導者もだれも責任をとらず、「ずるずると国を挙げて戦争の渦中に突入した」[9] という驚くべき「無責任の体系」[10] である。国家秩序は絶対的価値体系である天皇を中心として連鎖的に構成され、上から下への支配の根拠が天皇からの距離に比例する。上にいる者ほど天皇に近い。その行動は天皇のご威光をあおぐものであるから、自らの責任において主体的に決断するという意識がない。一方天皇は無限の古さにさかのぼる伝統の権威を背後に背負っているということで、絶対的価値の体現者であるにすぎない。無より価値を創造したものではない。天皇もまた主体的自由の所有者ではなかった [11]。いずれも主体的決断による秩序の行為者ではないという驚くべき体制である。ここで論じられているのは、否定的な意味での主体的作為の問題である。「自由なる主体的意識」の欠如した、「各人が行動の制約を自らの良心のうち」にもたない国体の特質を問題としている。「超国家主義の論理と心理」の最後で、新しい時代への期待をこめて「日本軍国主義の基盤たる国体がその絶対性を喪失し今や始めて自由なる主体となった日本国民にその運命を委ねた日であった」と述べているが、丸山は「戦後日本の秩序を不断に作為する近代的主体」[12] の実現を戦後日本においてめざしたのである。1946 年の「近代的思惟」においては次のように記している。

> 私はこれまでも私の学問的関心の切実な対象であったところの、日本に於ける近代的思惟の成熟過程の究明に愈々腰をすえて取り組んでいきたいと考える。従って客観的情勢の激変にも拘らず私の問題意識にはなんら変化がないと言っていい [13]。

「ファシズムの「世界史的」意義の前に頭を垂れた」戦時中、戦争協力した文化人たちへの痛烈な批判であると同時に自からの研究姿勢が、終止変わらないことの自負とこれからも変わることがないという宣言でもある。戦後日本に近代的な主体者を実現させたいという丸山の思いは、多くの論文に述べられている。「日本における自由意識の形成と特質」（1947）のあとがきに「吾々は現在明治維新が果たすべくして果たしえなかった、民主主義革命の完遂という課題の前にいま一度立たせられている。吾々はいま一度人間自由の問題への対決をせまられている。」とある。丸山は「戦後の「理念」に賭け」[14] ていたのである。「日本に於ける近代的思惟の成熟過程の究明」が終止一貫した研究主題であり、また同時に「民主主義革命」「人間自由の問題」「主体的作為」「公私の分離」といった近代的なものの実現もまた丸山のテーマでもあったのである。丸山は 1946 年以降 1961 年に発刊される『日本の思想』までに、論文と同時に数多くの時事的な問題についての発言をしている。これらの政治論集は『現代政治の思想と行動』（1964 年）としてまとめられるが、これらの「政治論」は「戦後の理念」の実現をはたしたいという問題意識に促され、書かれたのである。

> 「和」というのが平等者間の「友愛」でなく、どこまでも縦の権威関係を不動の前提とした「和」であり、「和」と「恩」の精神は大は国家から小は家族まであらゆる社会集団にちりばめられている。このように日本の諸社会関係の民主化をひきとめ伝統的な配線構造を固定化している力がどんなに強靭なものか [15]。

> 現実とはこの国では端的に既成事実と等置されます。現実的たれということは、既成事実に屈服せよということにほかなりません。現実が所与性と過去性とにおいてだけ捉えられるとき、それは容易に諦観に転化します。「現実だから仕方がない」というふうに、現実はいつも、「仕方のない」過去なのです [16]。

このように戦後に書かれた丸山の論評は「戦後の「理念」に賭け」ながら、理念にてらしてみたとき、戦後日本の「現実」は自らの理念とあまりにもへだたりがあることに、違和感を覚えていることをよく示している。丸山が考える近代的主体性は実現されうべくもない。しかし「理念は自然的傾向性の「流れにさからう」ところにこそ存在意義がある」[17] と考えた丸山は、戦後日本の「現実」に流されることなく、「現実」をこえた理念にもとづいて思考するという姿勢をくずすことはなかった。現実だから仕方がないということではない、理念にてらしてみて現実をとらえなおすことこそ必要なことなのである。

Hosei University Repository

戦後日本の現実はあいかわらず社会構造にせよ人間関係にせよ前近代的であり、そこには近代的主体は見いだせない。丸山の思考は、この現実を生み出し、近代的主体の実現を阻むものは何かという問いに向かうのである。この問いに答えるために、日本思想を日本思想の構造という点から考察したのが『日本の思想』（1961年）である。これは1950年後半に書かれた4つの論文をまとめたものである。「日本の思想」（『岩波講座　現代思想』第十一巻　1957年）「近代日本の思想と文学」― 一つのケース・スタディーとして」『岩波講座日本文学史』第十五巻』　1959年）「思想のあり方について」（『図書』　1957年）「「であること」と「する」こと」（毎日新聞1959年）から構成されている。

多様な問題がここでは論じられているが、「日本の思想」を中心に「日本思想」の特質をどのように丸山は考えていたかまとめてみたい。

日本思想の特質を「色々な「思想」が歴史的に構造化されない」「それらがみな雑然と同居し、相互の論理的な関係と占めるべき位置とが一向判然としていない」と述べている。ある時代の思想が、ある思想と出会ったとき、その思想はたがいに対決し、向き合い、そこからあらたな思想の構造をつくりあげ、次の時代に蓄積されていくということがない。さまざまな思想が交わることなく空間的に同時存在している。さまざまな思想が雑居している。「無構造性」「雑居性」が丸山の考える日本思想の特質である。

それはまた「何々即何々、あるいは何々一如という仏教哲学の俗流化した適用」にみられる相互に原理的に矛盾するものまで平和共存させる「無限抱擁性」を特質としている。そうした「精神的雑居性の原理的否認を要請」したマルキシズムまでもが、転向においては「抱擁と融合と一如」の「本然」の世界に帰っていくのである。

このような日本思想の特質の原型として丸山が考えたのは、宣長が見いだした儒仏以前の固有信仰である。「この「信仰」にはあらゆる普遍宗教に共通する開祖も教典」もない。固有信仰は思想的なイデオロギー的実体は何も持たなかった。そのために「縦にのっぺらぼうのようにのびた布筒のようにその時代時代の有力な宗教と習合することでその教義内容をうめてきた」。ほかのイデオロギーを取り入れなければ、道として成り立ちえない、したがっていかなるイデオロギーも受け入れるという無限抱擁性を持ったのである。「この神道の「無限抱擁」性が、さきにのべた日本の思想的「伝統」を集約的に表現している」というのである。

「ここにいたって、これまで丸山の著述には全く見られなかった＜日本的なもの＞が、宣長の古代日本論をつうじて登場している」[18]と米谷が指摘しているように、丸山は日本思想の考察をつうじて、日本思想の特質を形成する原型として「日本的なもの」に思い至るのである。

『日本の思想』のあとがきで「新たな思想にたいする敏感な感受性、その普及度のおどろくべき早さということと、他方における過去的なもの―極端には太古的なもの―の執拗な持続」という相矛盾するものが「日本の近代化の歴史過程でどのような機能をはたして来たかを解明」しようとしたと述べているが、ここですでに「日本の思想」に執拗に持続する太古的なものが問題として意識化されている。原型としての「日本的なもの」を明らかにするために、最古の文字史料にあたり、そこにどのような思想が見られるかを考察するという方法をとることで、「歴史意識の「古層」」が書かれたのである。

「古層論」に至るまでの丸山の思考の軌跡を、初期の論文から『日本の思想』までたどり、なぜ丸山が「古層論」に至ったかを考えたが、ここであらためて「歴史意識の「古層」」に焦点をあて、米谷論文での「古層」批判をとりあげながら、「古層論」の今日的意味を検討してみたい。

第二章　「古層論」をめぐって

論をすすめるにあたって、「原型」「古層」「執拗低音」とい用語についてふれておきたい。丸山は外来思想との接触によっても変わらない、歴史意識の基底に執拗に流れつづけるものを当初「原型」（1963年）という言葉で表現していた。「原型」というと「古代に「原型」が宿命的に決定され、そのまま固定」してしまうようにとられるのをおそれ、「古層」（1972年）という言葉を使うようになる。これもまた「マルクス主義における下部構造」のようにとられることをさけるために「執拗低音」（1975年）を使うようになる。しかしいずれも意味するところは同じである。

Hosei University Repository

「歴史意識の「古層」」のまえがきで、「たんに上古の歴史意識の素材をもとめるにとどまらず、そこでの発想と記述様式のなかに、近代にいたる歴史意識の展開の諸様相の基底に執拗に流れつづけた、思考の枠組みをたずねる手掛りを見ようというのが、本稿の出発点である。」と述べている。論文のめざすところが、日本思想の根底に執拗な低音のようにありつづける「古層」といったものを明らかにしようとしていること、またその「古層」こそが「普遍者の自覚」、それによってはじめて実現される「主体的な人格」を生み出すさまたげとなっていることを、明らかにしようとしていることを示している。丸山のこの試みはその論証の方法と「古層」という発想自体が、論文発表後おおくの批判をうけることになる。「古層論」を考えるにあたって、論証の方法と「古層」という発想がどのような批判をうけたのかについてふれなければならない。その論証の方法として、丸山はどのような方法をとったのだろうか。

（1）直接には開闢神話の叙述あるいはその用字法の発想から汲みとられているが、同時に、その後の長く日本の歴史叙述なり、歴史的出来事へのアプローチの仕方なりの基底に、ひそかに、もしくは声高にひびきつづけてきた、執拗な持続低音（basso ostinato) を聴きわけ、そこから逆に上流へ、つまり古代へとその軌跡を辿ることによって導きだされたものである[19]。

この論証の仕方が問題とされる。この論証の方法は、循環論におちいるという批判が、米谷が「丸山眞男の日本批判」でとりあげた問題である。丸山の述べる論証の方法論と米谷のそれにたいする批判とを比較しながら、まずこの問題を考えてみたい。丸山の論証の方法は（1）のように「開闢神話の叙述あるいは用字法」からそこに見られる発想法を汲み取る。その発想法を歴史意識の「古層」と名づける。この「古層」にもとづきながら、その後の日本思想にどのような形でそれが影響をおよぼしているかを時代を追って見ていく。それが「歴史叙述なり、歴史的出来事の仕方なりの基底に、ひそかに、もしくは声高にひびきつづけてきた、執拗な持続低音」を聴き分けるということである。そしてまたふたたび「古層」＝「持続低音」を歴史に聴きわけ、見いだしながら古代へとさかのぼっていくという作業によって、導きだされたのである。この論証の方法について、米谷は次のように述べている。

(a)「後代の外来思想が変容をうけるパターンを読みとる操作と、それに見合った思惟様式の「古層」を記・紀神話を素材として構成する操作は循環をなす。それならば外来思想がうける変容を「古層」のあらわれとして説明する叙述はまさに循環をなすなすことになる。そして論文「歴史意識の「古層」」全体の叙述はまさしくさまざまな循環の渦を構成している。」[20]

丸山は論証方法について次のように述べている。

（2）日本神話が形を整えた六、七世紀ごろには大陸のさまざまな文化の浸透を受けているわけですから、日本神話は原型そのものの表現ではありません。（中略）消去法による以外にはないといったのはそれです。日本神話のなかから明らかに中国的な観念―儒教だけでなく道教とか諸子百家とかも入れてそういう古代中国の観念に基ずく考え方やカテゴリーを消去していくわけです。（中略）そうすると何もなくなるかというとなくならない。サムシングが残るのです。そのサムシングというものが、原型―その断片をあらわしております[21]。

この消去法によって残ったサムシング、「古層」、「原型」を明らかにするという方法にたいし、米谷は次のように述べる。

(b) この消去法は外来思想と「サムシング」「日本的なもの」との弁別によってなされるが、その「日本的なもの」自体が消去法の結果として構成されるのであり、それによって外来思想の変容を説明しているという点で循環をなしている。」[22]

Hosei University Repository

(a)(b) で批判されているように、たしかに「古層」を前提にして歴史をたどるという方法、「古層」を前提にして外来思想から「サムシング」＝「日本的なもの」を抽出するという方法は、いずれも「古層」を論証するために「古層」を前提にしているという点において、循環をなしている。丸山自身「ここでの「論証」は一種の循環論法となることを承知で論がすすめられていることを、あらかじめ断っておきたい。」[23] と述べているが、丸山はこの論証法が循環論であることを認めた上でとっているのである。「こういう仕方が有効であるかどうかは大方の批判を俟つしかない。」とも述べている。たしかにある事例から広く一般的な結論を見いだすのは、困難な作業である。(b) についても、丸山は「この消去法は一種の循環論法になるのですが、それは仕方がないことなのです。」[24] と述べている。まず「古層」という仮説をたてる。それを論証するためには「古層」を前提とするという循環論にならざるをえない。問題はそれがどう論証されるかである。のちに述べるように丸山はそれを古代から江戸にいたる日本思想を「古層」という視点からとらえる日本思想史において論証する。

『古事記』『日本書紀』（以下『記・紀』と記す）という限られた素材から抽出された命題をもって、日本思想史全体の底を執拗に流れるサムシングを「古層」とすることができるかどうかは意見のわかれる問題である。だからこそ「こういう仕方が有効であるかどうか大方の批判を俟つ」ともいったのである。米谷は「後代に外来思想が変容をうけるパターンを読みとる操作とそれに見合った思惟様式の「古層」を記・紀神話を素材として構成する操作」と述べているが、「それと見合った思惟様式の「古層」」といういいかたには、丸山が外来思想が変容を受けるパターンを説明するために、それに見合った思惟様式を『記・紀』から抽出したという意味がこめられている。いいかえるならば後代の外来思想の変容のパターンを説明するために、丸山は恣意的に「古層」という思惟様式を抽出してきたと述べているのである。これはつぎに引用する (c)「古層」は丸山が考えた「虚像」であるという批判につながっていく。

かぎられた『記・紀』の神話から、一般命題をひきだすことができるかどうかに問題があるのはたしかである。丸山の分析方法をみると、丸山は記・紀神話を読み、あくまでそこに記されている言語、叙述を分析することで、そこに示されている発想様式を読みとろうとしている。『記・紀』の思想はそのことば、文字、叙述に示されている。それらを分析することによって、そこにふくまれる『記・紀』の思想に近づくことができる。「なる」「つぎ」「いきほひ」という言語を分析することで、そこにある発想様式を導きだすことはできる。それはその時点ではあくまで『記・紀』に見られる『記・紀』的な発想様式である。そこに導きだされた発想様式が、その後の日本思想にどのように表れているかが問題である。それはその後の日本思想史において検証することではたさられる。その検証をとおして、はたしてそれが「近代にいたる歴史意識の展開の諸様相の基底に執拗にながれつづけた思考の枠組み」であるかどうかが明らかにされるのである。

丸山はまず『記・紀』に『記・紀』的な発想様式を見いだした。その『記・紀』的な発想がその後の日本思想史のなかで、各時代の思想とどのような関連をもっているかを、近代にいたるまで考察する。その作業を今度は近代から古代へとさかのぼりながら行なう。その思考作業によって『記・紀』的な発想様式が各時代の思想と関連があることを確認することで、そこではじめて『記・紀』に見いだした『記・紀』的な発想様式が、その後の日本思想と深いつながりがあるということができるのである。「古層」という視点からの日本思想史において検証する、そのような作業をおこなった上で、「古層」という考えが成立したのである。そのことは、論文「歴史意識の「古層」」においても『愚管抄』『水鏡』『大鏡』『神皇正統記』などに見られる歴史意識の検証からもうかがうことができる。

たとえば『愚管抄』の「道理をつくりかへつくりかへして世の中は過るなり」に時代時代によってその時代の道理がつくられるという「歴史的相対主義」があることの指摘（普遍的なものの欠如）[25]、『神皇正統記』の「天地の始めは今日を始めとするの理」に「現在」に巨大な運動量をもった行動エネルギーが発せられるという指摘（今を中心とした時間意識）[26] などによって「古層」と各時代の歴史意識とがどう関連し合っているかを読みとることができる。

米谷は次のようにも述べている。

(c) 記・紀神話から漢意を排して「原日本的」なものを構成し、それによって日本史を通じて伏流する＜日

Hosei University Repository

本的なもの＞を語ろうとした宣長の認識枠組みに囚われたものであり、その＜日本的なもの＞を古代日本に投影して虚像の「古層」をつくりあげた[27]。

すでに述べてように「古層」は丸山がつくり出した「虚像」なのではないかということである。丸山のいう「古層」は実体的に存在するようなものではない。あくまで外来思想をかならず日本的に変容させる「執拗に繰り返される低音音型」のようなものである。実体的に存在しないとすると、それがあるかどうか検証することは不可能である。米谷が「虚像」というのは「古層」が実体的なものとして検証不可能である、日本思想に一貫してながれる「日本的なもの」などあるのだろうかという立場からの指摘である。

日本歴史、日本思想史をふりかえってみたとき、なんども繰り返される連続的な動きがある。新しい文化の大きな影響を受けたのちにも、影響を受ける前の時代のものが連続して残りつづけるということがある。丸山は律令制を例にとって述べているが、中国との文化接触によって国家体制を法制的に変えても、社会体制はそれ以前の体制が連続して残りつづける。外来文化は移入後、日本的に変容されていく。このような前の時代の連続性という事象は、古代だけでなく近代にいたるまで起こっている。こういった歴史の動向のなかにある、外来文化の影響を受けながらも残存しつづける何かを仮説として立てることは可能である。問題はこの仮説がどのうように検証されるかである。仮説が日本歴史、日本思想史のなかで検証されるならば、それは法則として認められることになる。

この検証作業は丸山においてどのようにおこなわれたのだろうか。それはすでに述べたように「古層」という視点からの日本思想史においてである。一九四七年からの日本思想史連続講義でおこなわれた、古代から江戸時代にいたる日本思想についての考察である。この連続講義は『丸山眞男講義録』として七冊にまとめられたが、一九六四年から一九六七年の『講義録』は「古層論」を検証するための「古層」をめぐる日本思想の通史である。たんなる通史ではなく「古層」をめぐる日本思想の問題史である。

米谷の「丸山真男の日本批判」が発表さたのは、一九九四年である。『講義録』全七冊が刊行されはじめたのが、一九九八年からである。米谷がこの論文を書く時点では、『講義録』で展開された丸山の日本思想史について読むことができない。ひとつの論文から、そこに述べられている「古層」を「虚像」と批判できたとしても、『講義録』での綿密な思想史を読んだのちにも、丸山の「古層」は丸山のつくりだした「虚像」といいきれるだろうか。「古層」は虚像であるという批判は、丸山の『講義録』での「古層」という視点からの膨大な日本思想史を前提としていない批判といわなければならない。

丸山は古代から江戸時代にいたる日本思想史を「古層」という視点から考察することで「古層」を検証しようとした。丸山のおこなったこの日本思想史のもつ意味は、日本思想史における「古層」が、外来文化を日本的なものに変容させるというマイナスな働きだけではなく、そこから「主体」的な動き、「普遍的なもの」を生みだしていく可能性をもつことを見出している点である。

日本思想史に「古層」から「古層」を超える思想が生み出される事例について丸山は述べている。外来思想にまじりあい、外来思想を日本的に変容させるというマイナスの契機だけではなく、そこから「古層」を超える思想が生まれ、「古層」を超える思想はさらに「古層」的なものに浸透していき、それを変えるという動きも見出している。「古層」と外来文化（儒教、仏教）とが接触することで「新層」が形成される。そこから丸山が指摘したように「十七条の憲法」、鎌倉仏教に「脱古層」的思想が形成されるということがおこる。蓮如と一向一揆にみられるように「脱古層」的思想は下降していき「古層」を「脱古層」的なものに変容させる働きをすることもあると丸山は考える[28]。このように「古層」は一方向的に隆起するだけでなく、武士のエートスに丸山が見出したように、そこから「古層」自体が「脱古層」的思想を生み出す可能性ももっている。こうしてみると丸山がおこなった日本思想史における「古層論」は、ダイナミズムをもったさまざまな可能性をふくんだ思想史論ということができる。それはいいかえれば、長年丸山がめざしてきた「普遍者の自覚」「主体的な人格」の実現の可能性が、日本思想史においても見出しうるという発見である。

Hosei University Repository

おわりに

「古層的」思考様式は「普遍者の自覚」「主体性の確立」を妨げるものでありながら、そこから「普遍者の自覚」をうみだす活力をもつものでもあることを丸山は日本思想史のうちに見出した。しかしながらそれはわれわれ自身がたえず「古層」的なものに向かい合い、それを超えようと努力をすることによってはじめてもたらされるのである。その努力を怠れば「古層」は隆起しつづけ、われわれを「古層」的思考様式へとりこんでいく。「古層」的なものと「脱古層」的なものとはたえずせめぎあっている。丸山が「精神の永久革命」というのは、われわれがたえず「古層」的なものとの対決をしつづけることをさして述べたことばである。われわれが「古層」的なものと向き合いそれを克服する努力をしなければ、丸山のいう「理念」はいつまでも獲得されることはない。「古層」が隆起するにまかせることになる。「古層論」はまさに今日的な意味をもっているのである。また日本思想史にあらたな展望をあたえる思想論である。

注

丸山眞男の著作からの引用は以下のように略記する。また引用文中の著者による傍点は省略した。『丸山眞男集』は『集』『自己内対話―３冊のノートから』は『対話』『丸山眞男講義録』は『録』とする。

1 『集』第十一巻　180p ～ 181p
2 米谷匡史「丸山真男の日本批判」『現代思想』vol, 22 － 1　1994 年
3 『集』第一巻　179P
4 同　226P
5 『集』第二巻　22p
6 同　27p
7 田中文久『丸山眞男を読みなおす』44p　講談社選書メチェ
8 『集』第二巻　124p
9 『集』第三巻　31p
10 『集』第四巻　140p
11 『集』第三巻　31p ～ 34p
12 平野敬和「現代政治の思想と行動」65p『丸山眞男―没後 10 年、民主主義の＜神話＞を超えて』河出書房
13 『集』第三巻　3p
14 『対話』　246p
15 『集』第四巻　329p
16 『集』第五巻　195p
17 『対話』　246p
18 米谷匡史「丸山眞男の日本批判」　148p
19 「歴史意識の「古層」」『忠誠と反逆』359p
20 米谷匡史「丸山眞男の日本批判」　153p
21 『集』第十二巻　149p
22 米谷匡史「丸山眞男の日本批判」　154p
23 『忠誠と反逆』358p
24 『集』第十二巻　149p
25 『忠誠と反逆』408p
26 同　394p
27 「丸山眞男の日本批判」　155p
28 水林彪は『原型（古層）論と古代政治思想論』において「古層」の隆起と「新層」の下降浸透という双方向の運動について論じている。